

2010年12月1日発行 第122号

目次

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| P1 巻頭言 | P6 「フェスティバルーン」活動報告 |
| P2 日帰りバスツアー「足利学校とフラワーパーク」 | P7 コラム【われら港ユネスカン！】 |
| P3 大使館訪問「パキスタン」 | P7 「関東ブロック・ユネスコ活動研究会」報告 |
| P4 日本文化紹介シリーズ「韓国伝統音楽・舞踊」 | P8 事務局便り |
| P6 「みなと区民まつり」活動報告 | |

「三つのP・三つの心」50年

港ユネスコ協会副会長 松本洋

2011年は港ユネスコ協会の設立30周年の年に当たる。ユネスコ憲章に「人の心に平和のとりでを築く」という言葉があるが、いささか閉鎖的な響きに聞こえなくもない。私自身はもう少し開放的に行動してきた。途上国58ヶ国を、日本のODA調査のために10年間で駆け巡り、現地の人たちと人間として対等に付き合ってきた心算である。

私の人生を振り返ってみると、「三つのP・三つの心」が興行士としての思索や行動の軸になっていると思われる。普通は「興行師」と書くが、私は「士」という字が好きで「興行士」と書いている。また、上の「十」と下の「一」に分けると、一から十まで手掛けるという概念も包含するからである。国際貢献にもこの軸は欠かせない。それが、これまでの経験がもたらした私の持論。この「三つのP・三つの心」とは、

「Public Mind」 「Produce Mind」 「Play Mind」 である。

まず、「Public Mind」とは、日本語で言うと「おおやけ（公）心」。

国際貢献にのぞむ第一歩であり、当然に求められる心構えである。自分の行為が、広く利他的なことの実現のためにあり、その実現こそが自分の満足になること。市民生活の基盤である「プライベート」とこの「パブリック」を必要に応じながら峻別して思考したり行動できる人のことを、「おおやけ（公）心」（パブリックマインド）のある人、と呼ぶことにしたい。（日本では「公」はイコール「官」であり、役所や政府が担当することなので自分たち個人には関係ないと考えられがち。今ではごく常識的になった「市民」という概念も、日本に定着してからまだ日が浅いといえよう。）

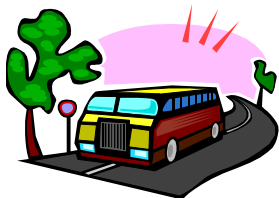
公共心、公益心といった考えは、われわれ日本人にもなじみのある概念である。その範囲を地球上にもつと拡げて行動するべきではなかろうか。つまり Think local, act global である。

私利私欲からではなく、自分が、あるいは仲間たちといっしょに世間に対して出来ることはないか。このように「官」の意味ではない本来の「公」を意識するには、その前提として「個人」がしっかりと存在しなければならない。この点も重要。

「Produce Mind」とは、「しかけ心」。

プロジェクトを仕掛ける人間にはまず、独創性がなければならない。そして、関係した人々を楽しませようという精神や、一度決定したら最後までなんとしてでもやりぬく粘り強さとこだわりも必要。さらに、その新たなプロジェクトによって、人々に認められる新しい価値がなにかひとつでも社会に生み出されること。これにはしばしば、広い視野と長期的な取り組みが求められる。

（5ページへ続く）



日帰りバスツアー 「足利学校」と「あしかがフラワーパーク」

2010年9月26日（日）

今年のバスツアーも大変多くの方々にご応募を頂き、この旅行を楽しみに集合場所に早くからお集まり頂きました。前日の雨から一転、好天に恵まれ8時45分、時間通りに新橋を出発して、高速も日曜日ということもあり、渋滞が予想されましたが、無事、1番目の目的地「あしかがフラワーパーク」に到着。萩やスイレン、シソ科のアメジストセージが紫の美しい花を咲かせており、季節を感じさせる色とりどりの花々は、普段の忙しい時間を一瞬にして忘れさせてくれました。お昼は、パーク内にある「あじさい」で秋・冬限定のきのこと御膳に舌鼓。きのこの風味満点でボリュームもあり味覚の秋も満喫できました。

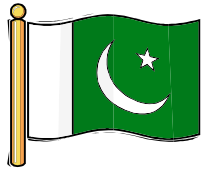
次の目的地は、日本最古の学校と言われている「足利学校」。平安時代初期もしくは鎌倉時代に創設されたと伝えられる中世の高等教育機関であり、室町時代から戦国時代にかけて、関東における事実上の最高学府であります。教育の中心は儒学だったのですが、易学においても非常に高名であり、また兵学、医学も教えました。戦国時代には、足利学校の出身者が易学等の実践的な学問を身に付け、戦国武将に仕えるということがしばしばあったといわれています。学費は無料であり、学徒は入学すると同時に僧籍に入りました。学寮はなく、近在の民家に寄宿し、学校の敷地内で自分たちが食べるための菜園を営んでおり、構内には、菜園の他に薬草園も作られていました。1530年頃には火災で一時的に衰微したが、第7代しょう主(校長)、九華が北条氏政の保護を受けて足利学校を再興し、学徒数は3000人と記録される盛況を迎えました。この頃の足利学校の様子を、キリスト教の宣教師フランシスコ・ザビエルは「日本国中最も大にして最も有名な(坂東の大学)」と記し、足利学校は海外にまでその名が伝えられました。

私が実際訪れての感想は、学校門をくぐるとそこは別世界が広がっていました。入学証を頂き、少し賢くなった気分になったところで、中に入ると現在の学校とは全く違い、遊具は無くすばらしく復元された庭園や建物が迎えてくれました。驚いたことは、現在のように時間割はなく、自学自習が基本であったとのこと。昔の人たちは勤勉な人たちが多く、私も見習わなくてはならないと強く感じました。又、自分で見たりしているだけでは、気づかなかったり、わからなかつたりするところをボランティアの方が丁寧に説明をして下さり参加している方々も興味津々の様子でした。

あっという間に楽しい時間は過ぎ、帰路へ。途中予定よりも時間が早かったので、道の駅「みかも」により、新鮮な野菜や、まんじゅうなどを袋いっぱい購入して東京に着きました。

最後にこのバスツアーを支えて下さった方々、運転手さん、バスガイドさんに感謝申し上げます。
(会員開発委員会 副委員長 三好潤)





パキスタン大使館訪問

2010年11月22日（月）

近くの有栖川公園の紅葉も綺麗に色づいてきた11月22日（月曜日）の午後2時から約2時間、港区南麻布4丁目にあるパキスタン大使館を会員18名で訪問させていただいた。元麻布にあった大使館が老朽化したため、2年半前にここに引っ越した。公使のイムティアズ アハマド氏が日本語で広い館内を案内して下さった。（ご記憶の方も多いと思いますが、アハマド公使には、8月5日の当協会主催の国際理解講演会での講師をお願いしており、今回のパキスタン大使館訪問を快く受け入れていただきました。）

館内に入ると、南アジアと日本の大きな地図が壁に貼ってあるのが印象的だった。パキстанは、イラン、アフガニスタン、中国、インドと国境を接しており、日本の約2倍の大きさである。建物の1、2階は大使館でその上の階は職員の住まいで、24人が住んでおられる。大使の部屋、会議室、ビザ・パスポートの申請室、報道官室などを見せていただくことができた。壁には落ち着いた色のジュタンが飾ってあった。

広い会議室では、パワーポイントを使い、歴史、文化、暮らしの説明をしてくださった。まず初めに、国旗の話があった。緑はイスラムの色、白は平和を表している。続いて、インダス文明の発祥の地としての歴史を持ち、1947年イギリスから独立したこと、人口は、1億7000万人であるなどの話があった。気候に関しては、アハマド公使も温暖化を心配しておられた。またスライドを使い、首都はイスラマバードの様子、中国との国境を流れるインダス川



（2890km）、北部にそびえる8000m級の5つの山々と沢山の氷河を見せていただいた。お祭り、結婚式、車輦が見えなくなる程に人々が群がった電車（アハマド公使は「電車の時速20kmかな？」と話しておられた）のスライドには、お国振りが窺えた。気温は、驚いたことに寒暖の差が大きくマイナス35℃～プラス55℃の幅がある。

お話の後はおやつサービスがあった。おやつは、豆の粉で野菜を包んで揚げた「パコーラ」というお菓子とクッキーで、ココのあるミルクティーと一緒にいただいた。

最後に質問を受けてくださった。それらの質問に対する答えは以下のものであった。

- 国旗の月と星は回教と発展を意味している。
- 医療制度は日本のような保険制度はないが、貧しい人のために政府の病院がある。
- 教育に関連して、アハマド公使は3歳半から小学校に入学したが、現在は6歳からである。
- 今年の大洪水で4つの州が被害を受け経済問題となった。（日本からの支援に大変感謝しておられた。）
- 老後の生活は、老人ホームはなく、人口の半分が若い人であるので、家族で住み、協力して老人を支えている。パキスタンでは、第1子が責任を持って親を看ている。自分は、幼い頃40人の大家族であった。
- 言語については、ウルドゥー語が国語だが、地方によって色々な言語を使う。公用語は、英語である。
- 空手は、人気のあるスポーツである。パキスタンには、マラカラというレスリングがあり、これは相撲に似ている。
- 輸入品は、車の95%が日本車、テレビを含め家電製品は日本製品が多い。

以上、我が国と関わりの多いパキスタンの国の事を学べて良かった。男性のみの職場（職員）と伺ったが、とてもアットホームな感じを受けた。お世話になった大使館のスタッフの皆様に感謝いたします。

（会員開発委員会 副委員長 井口フミ子）

韓国伝統音楽・舞踊「サルプリ」公演を鑑賞して…

日時：2010年11月5日（金）19:00～

会場：港区赤坂「草月ホール」

今回は、草月ホールにて韓国伝統音楽・舞踊公演「サルプリ」を観賞しました。今回の文化紹介は日本文化そのものではないが、そのルーツをたどればどこかで日本とも通じる点があり、飛鳥時代から深く関わりのあるお隣・韓国の古典音楽と舞踊です。

「サルプリ」の「サル」とは、人が持って生まれた悪い運勢、すなわち厄のことを言い、「プリ」とは振りほどくという意味だとプログラムに説明がありました。まったく初めて観るので胸わくわくでした。

さて、演奏家の5名は韓国から来日された方たち。キム・チョンマン氏（杖鼓チャンゴ）重要無形文化財第5号パンソリ鼓法準人間文化財でもあります。イ・セファン氏（玄琴コムンゴ）、ウオン・ジャンヒョン氏（大琴テグム）、ハン・セヒョン氏（薺篳ピリ）、イ・テベク氏（牙箏アジェン）、そして在日のチョウ・スオク氏（舞踊）、チャン・リヒャン氏（伽耶琴カヤグム、玄琴コムンゴ）、以上の方々の演奏と舞踊です。以下プログラムより一部抜粋しながら書きます。



（撮影：佐々木敏晴）

1) 「靈山會相」重光之曲“上靈山”初章～二章

コムンゴ：イ・セファン

本来は仏教に基づく声楽曲で宮中に伝承されてきたものが、仏教色は薄らぎ器楽曲にかわり、ソンビ（文士）たちが瞑想的風流音楽として楽しむものとなってきた。重光之曲は弦楽器玄琴が中心である。ゆったりとした速さで緩やかに進行する。くりかえされるリズムはまことにのんびりとして音と音の間が心地よい。

2) 散調合奏 出演楽師全員による合奏

散調は19世紀末に誕生した伝統器楽独奏曲である。即興性の強い音楽のシナウイ、声楽のパンソリなどを融合し新しい様式となった。伽耶琴ではじめて散調は演奏されたが他の楽器にもひろがって玄琴散調、テグム散調、牙箏散調などが生まれる。もともと独奏曲であったが現代では合奏されることも多く散調合奏という。それぞれの楽師のそれぞれの個性ある音とハーモニーが楽しめる。

3) 李梅芳流僧侶舞

チャンゴ：キム・チョンマン、ピリ：ハン・セヒョン、テグム：ウオン・ジャンホン、
アジェン：イ・テベク、鉦：イ・セヒョン、舞踊：チョウ・スオク

もとは寺院の僧侶の踊りであったが、芸術形式を備えた舞。発展し韓国を代表とする民族舞踊である。長衫（サンセン）の裾のなかで太鼓のバチを持ち、さらに長くなった長衫の動きは美しい。さらに太鼓を力強くたたき姿は優雅にたくましい。伴奏の楽器も加わることで芸術性が高まる。李梅芳流僧侶舞は重要無形文化財第27号である。力強い舞であった。

4) 「哀(エ)プリ」涙が真珠なら～京畿民謡メドレー（離別歌、金剛山打令、ノレカラク、倡夫、他）

カヤグム：チャン・リヒャン、チャンゴ：キム・チョンマン、ピリ：ハン・セヒョン、
テグム：ウオン・ジャンヒョン、アジェン：イ・テベク

エプリとは悲しみを解くという意味で名人ソングミョン（1923～86）とチミョンヒ（1909～79）への尊敬の気持ちをこめて構成された演奏。ソングミョンはカヤグムの名手で伽耶琴散調の人間国宝（1968）夫チミョンヒは京畿音楽の名人。「涙が真珠なら」はソングミョンの作曲。離別歌以下ソウル京畿道の民謡である。いずれも抒情的で柔らかな演奏で聞く者を穏やかになごませる。

5) 李梅芳流サルプリ

舞踊：チョウ・スオク

ももとは厄を払うために踊った巫俗儀式にはじまり朝鮮時代ハンソンジュン(1875～1941)によって舞台化されたサルプリ。シナウイを伴奏とし白いスゴン（手拭い）をもって舞踊される。李梅芳流サルプリ（重要無形文化財第97号）は全羅道一帯に伝えられたもの。白のチマ・チョゴリ、白いスゴンの緩急ある美しい動きは見事としかいいようがない。

会場には高井会長、そして今回の韓国伝統音楽・舞踊「サルプリ」公演実行委員会顧問として労をとられた松本副会長をはじめ会員の方々がみえました。何とも言えない不思議な音楽。ある方はジャズにも通じるものありと言っていました。懐かしくもあり、エキゾチックでもあった公演の余韻は続きました。



（撮影： 佐々木敏晴）

（学術文化委員会 副委員長松崎加寿子）



（1 ページからの続き）

ひとつの事業に対する評価は、時代の変化によってニーズや判断基準も変わっていくために、つねに流動的。援助プロジェクトの評価を、日本では特に固定的に考えがちである。しかし、100パーセント成功しているプロジェクトも、100パーセント失敗のプロジェクトもありはしない。だから計画が竣工して運用に入ってから、必ずしも計画段階の仕様に拘束されるべきではない。もし計画通りいかないのであれば、援助供与国と受け入れ国、そしてプロジェクトを受け入れる現場地域の三者が話し合って知恵を出し合い、仕様書を修正すれば良い。プロジェクトは、工事の完成によって終わるものではない。時間という要素を考慮しながらそれを育て上げるべきである。プロジェクトは生き物であり、長期的な視野に立って着実に育て上げていくべきものである。

そうした視野と関係者の信頼が得られたなら、たとえ途中で挫折そうになったときでも、自分のためにやっているのではない、世のため人のためにやっているのだという信念が、行動を支えてくれる。そしてそういう意識が行動そのものを成長させていくと考える。

こうしてプロジェクトを産んで育てていくことこそが、「プロデュースマインド（しかけ心）」である。また、すぐれた「プロデュース力」は、ときに市民との有意義な関わりを仕掛けていく「パフォーマンス（仕組みづくり）」とも同義となる。

「Play Mind」とは、文字通りの「あそび心」（厳密に言えば、英語にはこういう言い回しはなく、英語の達人の村松増美さんが「Playful Mind」と直してくれたが、私は私の和製英語にこだわりたい。）

国際貢献に対して、肩肘張らずに余裕を持って、気軽に参加してみようという気持ち。日本人のきまじめな性格は、ともすれば国際協力に必要な以上の使命感を抱いてしまいがちである。しかし、ある種の遊びやお祭り気分があってこそ長続きするのだし、まわりの人々を巻き込む力も生まれてくる。政府の予算は増えたり減ったりするものだし、政府とNGOとの関係にしても日々揺れ動いていくわけだから、気持ちの余裕という意味の遊びも必要である。つまり、遊びと言っても、求められるのは自分だけが楽しい遊びではなく、周囲に良い影響を及ぼしていく遊び。これは、人と接するとき、あるいはなにかのプロジェクトに関わってものごとを円滑に進めようとするときにとっても大切なことであろう。遊び心を通して生まれていくコミュニケーションや信頼関係の中から、個人が埋もれた集団ではなく「個人として行動する日本人」として、国際貢献の現場で自分なりの道やスタイルが見えてくるのではないだろうか。どんなに立派なプロジェクトであっても、それに関わる人間の心に余裕がなくては、あるいは人間関係にゆとりがなくてはスムーズには進まない。

われわれユネスコの活動も義務感や自己満足感だけでなく、「三つのP・三つの心」が是非必要と考えるが如何なものであろうか。

「みなと区民まつり」活動報告

日時：2010年10月9日（土）、10日（日）

会場：都立芝公園内「みんなの広場」

みなと区民まつりは、今年も沢山の区民の参加のもと、とどこおりなく行われました。

港ユネスコ協会は、「ボルネオに森を!!」と題して、都立三田高校ユネスコ委員会、明治学院大学ボランティアセンターのMGパールの皆さんとブースを運営しました。皆さん、ありがとうございました。

今年はあいにくの雨になりましたが、各委員会のパネル展示、ミニバザー、ボルネオプロジェクトを多くの区民の方々に宣伝することができました。雨のため、チラシの配布は多くはできませんでしたが、来年は各委員会の活動宣伝のチラシも、沢山配布できますよう、各委員会のご協力を、よろしくお願いいたします。

（みなと区民まつり委員会 委員長 北岡修）



明治学院大学MGパールの皆さん

都立三田高校ユネスコ委員会の皆さんからの感想をご紹介します。



「ユネスコの活動をしている人たちと話せてとても楽しかったです。いい勉強になりました。」（1年生の喜多原さん）

「みなと区民まつりのような大きな催しで、ユネスコの人たちと話したことは、今後のユネスコ委員会の活動に生かして生きたいと思います。」（1年生の鳥山さん）

「とても楽しかったです。ユネスコの仕事はすごくいいです。ユネスコは世界を手伝っています。私も手伝いたいです。」（ドイツからの留学生ニーレさん）

「ユネスコの活動は良く分かりました。お手伝いの仕事はあまり大変ではありませんでした。日本語を話すのは大変でした。」（メキシコからの留学生ヒトシくん）



「第10回フェスティバルーン」が開催されました

日時：2010年11月5日（金）午後

会場：港区立生涯学習センターと桜田公園

恒例の「フェスティバルーン」が今年も開催されました。昨年同様、少し汗ばむくらいの快晴の中で12時から開会式が行われ、港区教育委員会の高橋教育長と清水実行委員長（当協会副会長）などが挨拶に立たれました。続いて、参加団体約50の代表が30秒間PRを行いました。

ご存知かと思いますが、「フェスティバルーン」は、ここ生涯学習センター（愛称「ばる〜ん」）で活動をおこなっている民間の団体・グループがその活動成果を毎年秋に披露するイベントで、絵画・書道・写真・活け花などの展示、陶器・手工芸品などの販売、歌・踊り・演奏・スピーチなどの舞台発表、その他パソコン教室など、半日ゆっくり楽しめるものでした。当港ユネスコ協会も例年通り、事務局前の廊下で活動紹介のパネル展示とブレティンやチラシの配布を行いました。



また、桜田公園のグラウンドでは、港区と姉妹都市の関係にある福島県いわき市から出張してきたかに汁の大鍋・農水産物の加工品の販売や、スポーツ吹き矢の検定、ニュー新橋ビル商店連合会の出店販売等などが軒を連ねていました。夕方からは、勤め帰りのサラリーマンなども気軽に立ち寄って、楽しい半日のお祭りでした。

（事務局長 水野隆）

われら港ユネスカン！

今号から、港ユネスコ協会と一緒に様々な活動を行っている方々をご紹介しますコラムを設けました。第1回目は、都立三田高校ユネスコ委員会に所属している、2名の交換留学生をご紹介します。おふたりは、『みなと区民まつり』でも、ブースを盛り上げてくれました！

ニーレ・クマーさん（日本語原文のまま、カッコ内の漢字は編者が追加）

私の名前はニーレです。ドイツから来ました。今日本に1年間留学しています。私は日本へ行きましたから、日本の文化をいっぱい知りたかったです。

日本の文化とドイツの文化はぜんぜんちがいます。日本の文化のほうがおもしろいですね。日本にいますは毎日楽しいです。

ドイツの学校と三田高校はぜんぜんちがいます。ドイツはぶかつ（部活）ないです。それはざんねん。今のぶかつは毎日楽しいです。ドイツにはけっしてせいふく（制服）はありません。私はどちらでも楽しいです。

一週間前私たちは修学旅行ありました。京都、ならと大阪へ行きました。京都とならはほんとにおもしろかったです。京都とならはおてらばかりあります。いっぱい見ました。すばらしかったです。いい思い出いっぱいありますね！

ハイメ・ヒトシ・オエスト・シライくん（原文英語）

僕が日本に来たかった理由はたくさんありますが、そのうち3つの理由を書いてみます。

1. 僕は日本人の子孫です。おじいちゃん、おばあちゃんの国を知りたいと思いました。

2. メキシコ料理とぜんぜん違う日本料理に興味があります。将来はシェフになりたいので、日本料理について知りたいと思いました。

3. 日本はインフラが発達し、新しいものと古いものが同居しているととても魅力的な国だからです。

メキシコの学校と日本の学校には違った点がたくさんあります。日本では学校や家に入るとき、靴を脱がなければなりません。日本の学校には部活動がありますが、メキシコの学校にはありません。

おふたりとも、ありがとうございました！これからも遊びに来てくださいね。皆様のなかから、「こんな方をご紹介します」という方がおられましたら、どうか事務局までお知らせください。



「2010 年度関東ブロック・ユネスコ活動研究会」の報告

民間ユネスコ協会の活動がより活性化するようにと、(社)日本ユネスコ協会連盟に属する全国のユネスコ協会は地域別9ブロックに分れて、地域ブロックごとに年一度研究会が開催されています。

関東ブロックユネスコ活動研究会（1都5県）は6年振りに東京で開催され、酷暑の中320名が集い研鑽を重ね、交流をはかりました。

テーマは、「2010 ユネスコ新世紀 ～「環境」「科学」の視点から地域ユネスコ活動を～」

日時：2010年9月4日(土)・5日(日)

会場：青山学院大学のキャンパス(渋谷区)

*基調講演「2050年に炭酸ガス70%削減のシナリオ」

講師：甲斐沼美紀子氏（国立環境研究所地球環境研究センター温暖化対策評価研究室室長、工学博士）

*座談会「2050年の持続可能な社会を予想し、環境と科学の分野で、地域社会・地域ユネスコ協会のできることを討論する。」（2050年を予想する965人のアンケート結果も参考に）

出席者：甲斐沼美紀子氏（基調講演講師）、永野博氏（政策研究大学院大学教授）、小野田弘士氏（早稲田大学環境総合研究センター准教授）、鈴木貫太郎氏（市川市ユ協青年部）

*青年企画「過去・現在のユネスコ活動を振り返り、見つめ直すことから、『なぜユネスコ活動をするのか』『ユネスコ活動が今まで残ってきた意義』などを考える」

*3分科会テーマ：「環境・科学—私たちの地球環境はどのように変化するか」、「教育—持続可能な社会のための教育分野の展開」、「文化—地域ユネスコ活動の充実」

今回は「東京都ユネスコ連絡協議会」が実行委員会となり、都下の全ユネスコ協会から選出された実行委員が企画運営にあたりました。ユ協間の協力関係を高め、互いに刺激を授受し合い、また交流を広げる機会となりました。報告書は現在作成中ですので、楽しみにお待ち下さい。

（会長 高井光子）





事務局便り



【新入会員】《個人会員》アミル・ホスラビ・マンダナさん、千種信雄さん、立花勲さん、吉原洋美さん
 《賛助会員》永野博さん 《法人会員》テンプル大学ジャパンキャンパス

【今後の行事予定】（詳細は別途チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆1 月 16 日(日)12:00-15:00 新年懇親会(協会会員、家族)(新宿「ねぼけ」)
- ☆1 月 18 日(火)18:30-21:00 国際シンポジウム「変貌する家族」(麻布区民センターホール)
 基調講演: 上野千鶴子氏
 発言者: 楊逸(ヤン・イー)氏、岩田クリスティーナ氏、
 新美彰規(アミット・バクシー)氏
- ☆2 月 26 日(土)12:00-15:30 世界の料理「韓国の家庭料理(キムチ他)」(男女平等参画センター)
- ☆3 月 4 日(金)18:30-20:30 国際理解講演会「私の国ブルガリアの素顔」マルコバ・カテリナさん
 (生涯学習センター)

【ご寄付ありがとうございました】

「ミンダナオ子ども図書館」へ:

国際理解講演会「アフリカの現在と未来」の会場で 5,680 円(2010.11.17)

*現在、「ミンダナオ子ども図書館」への支援金や物資のご提供の協力をお願いしています。

どうか奮ってご賛同いただけますよう、お願い申し上げます。詳細は、事務局にお尋ねください。

【年末・年始のお休みのお知らせ】

事務局は、12月25日(土)から1月4日(火)まで年末・年始のお休みに入ります。

この一年、会員の皆様には多大なるご支援をいただきまして、ありがとうございました。

どうぞ良いお年をお迎え下さい。

(事務局スタッフ一同)

港 ユ ネ ス コ 協 会 事 務 局 (火 ~ 金 1 0 : 3 0 ~ 1 7 : 3 0)

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 FAX 03(3434)2233

電子メール: minato-unesco@nifty.com ウェブサイト: <http://minato-unesco.jp/>

■編 | 集 | 後 | 記■

◆つい先ごろまで記録的な暑さと言っていたように思うが、あれよあれよという間にもう師走である。年齢を重ねるごとに時間の過ぎゆく速度が増しているように思われる。せめて過ぎゆく時間の密度だけは薄めぬようにしたいと思う。(須田康司) ◆ハーバード大学サンデル教授の「正義」についての「白熱授業」に魅了された。1982年11月当協会設立2周年事業として、ハーバード大学ヴォーゲル教授(ジャン・アズ・ナンバーワンの著者)に、「国際秩序と日本の役割」という講演をして頂いたのを思い出す。奇しくもお二人の教授はハーバード大学には「トップに立ち世界を変える力を持つ人になりたい」「将来のより良い世界を作るために一生懸命やってみよう」という希望を持った学生が多くいると語られた。(高井光子) ◆晩秋のニューイングランドへ家族と短い旅行を楽しんできたが、どこへ行ってもほぼ完全に「Smoke-free America」が実現していて、じつに気持ちよかった。日本でも、この10月からのタバコ値上げを契機に、「Less smoky Japan」になってほしいものだ。(棚橋征一) ◆今号から、少しでも多くの会員や当協会と関係ある外部の方々に登場してもらい、誌面を少しずつでもおもしろくしていきたいと思っています。誌面に登場して欲しい会員などいましたら、当委員会あるいは事務局までご連絡下さい。(水野隆) ◆秋の防災週間には、東京タワー震災訓練や御田小学校避難所設営訓練など、有意義な訓練に参加することができました。東京タワーでは大展望台への階段を2往復して、負傷者に見立てた人形を担架で降ろしたりしました。現実には、大規模災害は起こることのないよう祈りたいのですが、いざとなったらひとりでも多くの方々のお役に立てるよう、体力増進も怠りなく精進したいです(島田和美)